

巻頭言

空前の宇宙ブームといわれて久しい。2010年6月の「はやぶさ」の帰還は一つのきっかけだが、もはやそれは一過性のブームではないようだ。「はやぶさ」や「かぐや」は日本の科学衛星の中でも特によく知られた存在になった。だがそれが惑星科学全体に対する国民の理解を深めることにつながったかという点、私は懐疑的だ。

例えば「はやぶさ」では、プロジェクト遂行におけるマネジメントやヒューマンドラマ、道徳的な側面などが強調されがちで、次いでイオンエンジンをはじめとする工学的成果が語られ、小惑星探査そのものの科学的意義について深く紹介されることは稀だ。「かぐや」でも、ハイビジョンカメラがとらえた月面や、月から見た地球の美しさ、月利用への発展性などが強調され、得られた科学的成果について触れられることが少ない。地形カメラやレーザ高度計などの成果は目立つが、その他の機器については初期観測の状況報告以降、情報発信はとだえがちだ。

これから本格運用や打ち上げを迎えるミッションはさらに厳しい状況が予想される。精力的な広報活動を行っている金星探査機「あかつき」はともかく、IMAPやGLIMS、惑星分光観測衛星SPRINT-A、ジオスペース探査衛星ERG、そして水星磁気圏探査機MMOと、どれも一般人にはとっつきにくいプラズマ物理系のものばかりだからだ。ただこの分野はポツと出のものではなく、日本の宇宙科学のお家芸とされる分野でもある。例えばSPRINT-Aは「のぞみ」や「かぐや」UPIによる紫外線観測の延長線上にあり、ERGやMMOは「あけぼの」やGEOTAILの延長線上にある。しかし、これまでの一連の研究成果は十分に一般向けに情報発信されてきたとは言えない。

これは私をはじめとする広報担当の力不足による部分も多いが、研究者側からの事前の連絡がなかったためにプレスリリースの機会を逃したケースも少なくない。研究の大きな進展があったとき、“でも一般人には理解されないだろう”などと遠慮せず、そのワクワク感を外向けにもっと語ってほしいし、そのために宇宙科学研究所の広報をもっと利用してほしいと願っている。

阪本 成一（宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所）